

佳作

「Aーからはいよいよなす」の言葉 と裁判員裁判を傍聴して感動したこと」

東京都 暁星中学校三年 澤田 憲

令和元年の夏、この女性とは結婚した。翌春からコロナ禍が蔓延し行動規制が求められる中、新婚生活を続けた。そして令和三年三月に男女の双子を出産でも夫は家事や育児に非協力的で一切の外出を禁じ、カメラを設置し行動を監視。育児ノイローゼに似た状況に陥った彼女は、コロナ禍二年目の夏、発育が遅い娘に暴行を加え殺害。ひと月後に自首。コロナ禍三年目の夏は拘留所で迎え、コロナ禍が明けた令和五年の夏の今、法廷にいる。

中三の僕は、「公民」の夏休みの宿題で裁判傍聴の為に地方裁判所へ初めて行った。塾の合間に半日だけ傍聴するつもりだった。だがその後、裁判所通いを続けた。なぜなら、あの鬱陶しいコロナのせいで、小学二年で始めた競技カルタで、高校日本一の憧れのカルタ部に入部したものの、練習は制限され

続け退部。将来なりたい職業も、小学三年の時に抱いたデザイナーの夢が崩れ、弁護士へと変わった。やるせない、何とも理不尽な現実に憤り、法曹界に入りたいと漠然と思い始めた。

そんな矢先に裁判傍聴に夢中になったのだ。

傍聴の初日、被告人の女性は警護官二人に挟まれ入廷し、僕の目の前で手錠腰縄を外された。その鈍い音が今も耳に残る。続いて三人の裁判官や六人の裁判員などが入廷。裁判長の一礼とともに、法廷にいる全員が一斉に起立し頭を下げた。これはフィクションではない、現実だとジワジワと実感し始めた。太った女性が証人席に座った。被告人の実母だ。検察官や弁護士、裁判員や裁判官が矢を射るように質問。証言台の下で手が震えていた。実母は被告人の娘と一度も目を合わせるような素振りがない。実家はそれ程離れていないのに、なぜ娘や孫の異変に気づいてあげなかったのだろう。被告人の人生に僕は同情した。

法廷での審理が続き、検察官は懲役五年を求刑し、弁護士は情状酌量のうえ執行猶予が相当と主張した。僕は被告人に同情しつつも、犯罪事実の認定は当然に有罪、しかも執行猶予は付かないだろうと思った。

量刑が何年になるか等と気軽に予想を立てていた。だが同時に、あの手錠腰縄の鈍い音を思い出し、そんな自分を戒めるもう一人の僕が現われた。

判決の日、傍聴席は満員になった。それまでガラガラな日が続いていた。冒頭二分間だけ記者が撮影。裁判長が判決文を朗読し始めた。懲役三年、保護観察付き執行猶予五年。理由、〇〇と続いた。読み終えた裁判長は徐に顔を上げ被告人を直視した。そして静かに、

「息子の為にも母として強くなって欲しい。」

と語りかけた。彼女は裁判長らが座る一段高い法壇を見上げ、

「はい。」

と確かに答えた。

刑事事件は判決後、裁判記録を閲覧できるが、裁判官や裁判員がどんな評議をしたのか知る術はない。だが最後の説諭を聴き、僕は感動した。被告人を理解した裁判官らの人柄が出た言葉だ。Aーは作文が書けても、こんな声掛けはできないだろう。資格取得がゴールではない。人格を磨こうと僕は決意した。